

特集 企業内診断士のパラレルキャリア

第4章

地域振興から農園支援まで 広がる活動の場

高田 直美さん



寺本 祐太郎
東京都中小企業診断士協会

子育てがきっかけで自身のキャリアを見つめ直して、診断士資格を取得、複業を通じてキャリアの可能性を大きく広げた女性診断士がいる。新卒で入社した製薬会社で順調にキャリアを積む一方、中小企業診断士としても多数の企業の経営支援に携わり、女性・若者支援にも取り組むなど、複業診断士として活躍の場を広げてきた高田直美さんだ。

本章では、高田さんが中小企業診断士としてどのように活躍の場を広げてきたのかを追うとともに、高田さんの複業への考えや活動への思いを紹介する。



高田直美さん

1. 子育てを契機に診断士資格を目指す

新卒で製薬会社に入社して以来、医薬品の営業への社内教育やマーケティングなどに従

事し、業務には「楽しく取り組んできた」という高田さん。しかし、子どもが生まれたことをきっかけに、目に見える形でのスキルや資格の取得を考えるようになったという。

「子どもが生まれてからは、夜遅くまで働くのは難しくなります。子育てをしつつ、どうすれば会社に貢献しながら長く働き続けることができるかを考えたときに、スキルを身につければ、短時間で効率的に、他の社員とも対等に働けるのではないかと思いました」

そこで知ったのが、中小企業診断士の資格だ。資格取得を通じて得られる経営全般の知識は、会社での業務に役立つと考えた。加えて、「長く働き続けたい」という思いを持っていた高田さん。診断士資格は、セカンドキャリアを考えるうえでも有用だと思った。

こうして、セカンドキャリアを見据えつつ、子育てと勤務先でのキャリアの両立を目指し、診断士資格の取得を決意したのである。

2. つながりと実績を築いた1年目

仕事と家事・子育てに追われながらも、何とか時間を捻出し、診断士試験に合格した高田さん。当初は、「中小企業診断士が何をするのかよくわからない」状態だったという。「何でも挑戦したほうがよい」というアドバイスを聞き、まずはさまざまな活動に参加することにした。

(1) 受験生支援団体

まず始めたのが診断士試験の受験生支援だ。自身も受験期間が長かったため、恩返しのため受験生支援団体に参加した。「参加したとたん、100人近い中小企業診断士の仲間ができ、そこから多くの情報や助言を得ることができた」と言う。

(2) 協会活動

仲間から得た情報をもとに地元の診断協会（東京都中小企業診断士協会城東支部。以下、城東支部）に加入し、プロコン塾や複数の研究会にも参加した。活動を通じ、1年目から多くの実践の場に恵まれた。

「協会や研究会活動を通じて、商店街や企業の支援をしてみないかとお誘いがありました。参加してみると、先輩診断士の方々から、診断や提案方法の基礎を学ぶことができました。また、プロコン塾でも、比較的大きな実務従事の案件やビジネス相談、セミナー登壇の機会を得ることができました。実績を積むことができたのは、とても大きかったと思います」

(3) 経営者との交流

高田さんが交流を持ったのは、診断士仲間にとどまらない。もともと「経営にかかわりたい」という思いがあり、女性のビジネス支援を目的とするマスターコースにも参加した。そこでの活動やセミナーを通じ、女性経営者やベンチャー企業の社長など、それまでのキャリアでは出会ったことのないような人たちと交流することができたという。

「『中小企業診断士の会合に参加すると、話も合って居心地がよい。しかし、なるべく外に行ったほうがよい』とアドバイスいただいたこともあり、経営者の集まりにも顔を出すようにしました。そのおかげで、多くの経営者たちと知り合うことができました」

こうして広がった経営者とのつながりが、後の仕事の獲得に結び付くのである。

3. 広がる診断士活動

2年目以降は、商店街支援や相談員などを担当しつつ、時間的な余裕があれば企業支援にも取り組んだ。加えて、人とのつながりや実績から、活動の幅はさらに広がっていく。

(1) 南伊豆町応援隊に参加

静岡県南伊豆町において、地域振興を目的とする南伊豆商工会の事業に「専門家委員」として参加した。きっかけは、企業内診断士のイベントの情報だ。「過疎化が進む南伊豆町を何とか支援できないか、みんなで考える」という企画があり、その後も継続的な支援を呼びかける診断士仲間がいた。

「私は浜松市出身で、東京にいながら浜松の支援ができたならと考えていたため、『これがうまくいくのなら、全国でも同じことができる』と考えて参加しました。実際に南伊豆町に泊まり込んで、町の各産業の主だった方たちにヒアリングし、報告書作成と発表会を行いました。その後も支援を続け、私自身も東京の人と南伊豆町をつなげるイベントを企画・運営しました。コロナ禍の現在も、SNSを通じて南伊豆町の魅力を発信する企画が盛り上がっていて、思い出深い活動です」

(2) 環境省主催「ウィルラボ」メンター

「ウィルラボ」は、2018年に環境省主催で始まった、環境課題解決型ビジネスに取り組もうとする若手起業家の発掘・支援プログラムである（2019年以降はTJラボ）。このウィルラボにおいて、高田さんは起業家を後押しするメンターとして採用された。

メンターは現役の経営者や経営の専門家を対象として公募があり、診断士仲間のついでで知った高田さんは、「経営支援にかかわりたい」との思いから応募。見事、採用された。

「中小企業診断士は、資格取得の直後から実践の機会があります。私も、1年目から実績が積み上がっていました。また、『会社員」

としての応募と、『中小企業診断士』としての応募とは、評価が異なります。中小企業診断士という肩書きに対し、一定の評価はしていただけたのではないかと思います」

いざ参加してみると、著名な若手起業家やソーシャルビジネス支援の第一人者も名を連ねていたそう。彼らと一緒に取り組むことで、新たな輪を広げることができた。また、新しく何かを始めようとする人にかかわる創業支援は、純粋に楽しかったという。

(3) 企業から初めての直接依頼

3年目には、ある女性経営者から「資金調達の支援をお願いしたいのですが、中小企業診断士の高田さんならできますか」と、仕事の依頼があった。「初めて経営者から直接依頼を受けたので、うれしかった」と当時を振り返る。

その経営者とは、とある経営者団体でも活動する中で仲良くなり、経営相談や支援の話が持ち込まれるようになった。

(4) 地元での農園支援

高田さんは、城東支部での地域支援にも積極的に取り組んでいる。その1つの例として、農園支援がある。

東京都墨田区にある「たもんじ交流農園」は、地元の多聞寺が無償で貸し出した敷地を地域住民に開かれた農園として整備したものだ。商店街支援に携わってきた高田さんは、地域のまちづくり協議会ともつながりがあり、



農園で汗を流す子どもたち

その縁で農園支援にもかかわることとなった。

「敷地の草取りに参加すると、暑い中、地元の人たちがおにぎりを持って手伝いに来てくれました。草ぼうぼうだった場所が、今では農地になり、イベントを開くと多くの子どもたちが集まってくる。もともと『シニアが集まって生きがいになる。子どもたちも集まって楽しい』というコンセプトから始まったから、それが実現できたのです」

4. 中小企業診断士にとっての複業

(1) 安心感とやりがい

製薬会社に勤めながら、中小企業診断士としても活躍の場を広げてきた高田さん。複業のメリットとして、以下の点を挙げる。

「複業のメリットは、正直に言えば安心感。勤務先からの収入があるから、無理にお金を稼ごうとせずに、自分が本当にやりたいことができます。一方で、勤務先にいつ何が起こるかわからない。もし、何かがあっても、何とか生きていくスキルを磨くことができます」

不確実性が以前より高まっている今の時代。収入面で勤務先への依存を減らせられれば、安心感につながる。一方で、安定した収入があるからこそ、本当に取り組みたいこと、楽しいと思えることに集中できる。まさに複業だからこそ得られる安心感とやりがいだろう。

(2) 長く働きたい

複業のメリットはこれだけではない。高田さんは、現在の勤務先の退職後に続くキャリアも見据える。前述のとおり、高田さんが中小企業診断士を目指した理由の1つは、「長く働きたい」だ。実際、診断士資格を取得したことでキャリアの可能性は広がった。

「中小企業診断士でなくても、コンサルタントとして働けるし、地方創生もできます。しかし、会社で働いているだけでは、なかなかそれができるといえる考えは生まれませんし、出会いもありません」

中小企業診断士としての複業により、高田

さんのキャリアは、幅の広がりだけでなく、その長さも将来に延びているといえるだろう。

(3) メリハリをつけた複業を

一方、複業に際しては誰しも時間の確保が課題になる。勤務先での業務や家庭を抱える中で、バランスをどう取ればよいのだろうか。

高田さん自身は、「勤務先の繁忙もある程度読めるし、幸い今の時代は以前より残業が減った」ため、それほど大きな苦労はないという。とはいえ、勤務先の繁忙期や子どものイベント時期などは、診断士活動に割ける時間を減らさざるを得ない。

そこで大事になるのは、メリハリだ。複業をする際は、勤務先での業務や家庭とのバランスを考慮し、常に優先順位を付けながら行うことが大切だという。

「娘の大学受験の時期はサポートが大変だったため、特に冬の間は活動を減らしました。ルーティンで請け負っていた業務がありましたが、事前に事情を説明して業務を減らしてもらいました。また、勤務先で結果を出さなければならぬ時期はその業務に集中することで、その後の複業にも集中して取り組みます」

自身が本当に興味のあること、相性の良い活動に集中するという意味でのメリハリも重要だ。さまざまな場に顔を出すようにしてきた高田さんだが、自身の興味や時間と相談しながら、断りを入れることも必要だという。

5. 支援への思いと今後の展望

(1) 思いをかなえ、成長を後押しする

複業診断士として活躍の場を広げてきた高田さんだが、城東地域での企業支援にも多数携わってきた。城東地域には、昔から事業を営む製造業などの企業や、先代から事業を受け継いだ2代目経営者も多い。高田さんは、そうした格別の思いを持って事業を営む経営者の成長を後押ししてきた。

「補助金が採択されると、経営者の方は喜

んでくれます。しかし、単に補助金を得たというだけではなく、そこから成長していかないとはいけません。企業が成長していくときに、自分がかかわっていければと思います」

根底にあるのは、「思いをかなえたい」という考え。目指すのは、企業、経営者、若者、女性などの「思い、創造を支援」することだ。

(2) 子どもや女性の可能性を広げたい

地域支援や経営支援を続けながら、高田さんは、今後は特に子どもや若者、女性の支援にも取り組んでいきたいという。

「子どもや若者などの支援は、事業として稼ぐのは難しい分野ですが、子どもたちはすごい能力を持っている。また、能力がありながら家庭と仕事の両立などで困っている女性も多い。そうした子どもや若者、女性たちの可能性を広げられるような支援ができれば」

そう今後の展望を語る高田さんだが、2021年に女子大学の社会人メンターに就任するなど、すでに行動に移し始めている。今後も人々の思いや可能性を支援し続けていく高田さんの姿は、想像に難くない。

高田 直美

(ただな なおみ)

大企業にて、マーケティング、資料作成、審査・監督業務などに従事。2016年中小企業診断士登録。中小企業診断士として、経営支援（戦略、販促）、創業支援、研修、執筆、補助金・助成金の事業計画書策定支援、地域活性化支援、若者・女性活躍支援などに携わる。環境省や区の事業の専門家、経営者や東京都、大学のメンターなども務める。



寺本 祐太郎

(てらもと ゆうたろう)

大学卒業後、外航海運会社に入社。事業部門での船舶運航管理や経営企画部門での全社予算策定などに従事。2021年中小企業診断士登録。執筆を中心に企業内診断士として活動。

